

香川県庁舎断面図 所蔵:香川県

1955年6月10日付の図面。高層棟の中央にコアがすえられ、背骨のように立ち上がる様子がよくわかる。

香川県庁舎データメモ

設計/丹下健三計画研究室(丹下健三・浅田孝・沖種郎・神谷宏治)
 構造設計/坪井善勝 設備/川合健二・坂輪俊夫 家具/剣持勇・松本哲夫・吉田安子・小林保治 壁画/猪熊弦一郎
 施工/大林組 設計期間/1954年末~1957年(南庭含む) 施工期間/1955年12月~1958年5月
 竣工日/1958年5月26日 構造/鉄筋コンクリート造8階建 延床面積/12,066.20㎡(竣工当時)
 受賞歴等/第1回BCS賞(1960年)、公共建築百選(1998年)、DOCOMOMO20選(1999年)

瀬戸内の丹下建築

丹下健三は、初期の作品の多くを瀬戸内で手がけ、日本の伝統や地域性、戦後民主主義に向き合った。丹下にとって瀬戸内は、自らのアイデンティティを発見し、多くの協働者を得て、現実の社会と関わる建築を初めて実現できたところなのである。その流れは、香川県庁舎で集大成された。

また、瀬戸内各地に残る丹下建築は、地域で活動する建築家たちの発想を刺激し、多くの名作を生み出すことになった。瀬戸内の建築文化の有力な起点となったのである。



竣工直前に記念撮影する丹下健三[1958年・春] /撮影:神谷宏治



高松一宮住宅団地[1960~64年] 現存せず/撮影:神谷宏治



戦没学徒記念館[1966年]模型/撮影:市川靖史



香川県立体育館[1964年]/所蔵:香川県



今治市庁舎・公会堂[1958年]、市民会館[1965年]模型/撮影:市川靖史

香川県庁舎東館

香川県庁舎建築ギャラリー(東館1階)

1958年(昭和33)に竣工した香川県庁舎東館(旧本館・旧東館、丹下健三設計)。戦後日本を代表する建築として評価され、現在でも訪れる人が絶えないこの建築は、どのように構想・設計され、実現したのか。また、どのような価値をもっているのか。当時の図面やスケッチ、写真などの資料から追ってみる。



竣工当時の香川県庁舎(中央)と高松市街地[1958年]/所蔵:香川県

モダニズム建築の中の香川県庁舎

20世紀初頭、近代的な生活や産業を背景にした新たな建築表現が生まれた。鉄・ガラス・コンクリートといった、新たな素材と技術を前面に押し出したこれらの建築を「モダニズム(近代)建築」といい、それまで主流だった歴史主義(古典主義・ゴシック主義)建築にとって代わっていった。

日本のモダニズム建築では、1920年代以来、明治時代から学習してきた歴史主義建築を乗り越え、日本の伝統的な建築空間や思想に学び、近代技術の成果を果敢に取り入れ、その上で人々の心に届く造形に到達することができる。その意味で、モダニズム建築は時代を映す「文化遺産」なのである。

1999年、国際組織「DOCOMOMO(モダンムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織)japan」によって、「文化遺産としてのモダニズム建築20選」が選定された。香川県庁舎東館は、豊かな空間構成、特に県民のための空間を積極的に採用していること、伝統表現、芸術家との協同、中央に耐震壁を置くコア・システム、などが評価され、庁舎建築としては唯一、選ばれた。

歴史主義との格闘



住友ビルディング [1926年] JS 住友合資会社工作部(長谷部鋭吉・竹原健造)



聴竹居 [1928年] JS 藤井厚二



土浦亀城自邸 [1935年] EK 土浦亀城

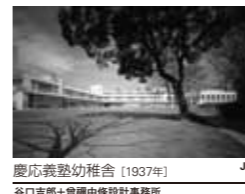


秩父セメント第2工場 [1956年] JS 谷口吉郎+日建設計

近代技術へのアプローチ



一連の同潤会アパートメントハウス [1926~34年、現存せず] JS (財)同潤会



慶応義塾幼稚舎 [1937年] JS 谷口吉郎+曾根中修設計事務所



香川県庁舎 [1958年] TM 丹下健三



群馬音楽センター [1961年] JS アントニン・レーモンド



神奈川県立図書館音楽堂 [1954年] EK 前川國男



東京中央郵便局 [1931年、一部現存] JS 吉田鉄郎(通信省官補課)



小菅刑務所管理棟 [1929年] JS 蒲原重雄(司法省官補課)



コアのあるH氏のすまい [1953年] EK 松村正樹 重要文化財 増沢海



コアのあるH氏のすまい [1953年] EK 松村正樹 重要文化財 増沢海

ダイナミックな造形を求めて



ハレスサイドビル [1966年] EK 日建設計(林昌二)



国立屋内総合競技場 [1964年] JS 丹下健三



八勝館御幸の間 [1950年] JS 堀口清己



宇部市民会館 [1937年] JS 村野藤吾 重要文化財



大学セミナーハウス [1965年] EK 吉阪隆正+U研究室



広島ピースセンター [1952年] EK 丹下健三 重要文化財



神奈川県立近代美術館 [1951年] EK 坂倉準三

日本の伝統と創造



県民に開かれたオープン・スペース

撮影：増田敬一

人々が集まり、くつろぐ広場。開放的なピロティや1階ロビー、築山の舞台をもつ南庭が緩やかにつながる、豊かな空間の構成。



伝統からの創造

撮影：三崎利博

木造建築をイメージさせる柱と梁の組み合わせ、また勾欄(手摺)付きのベランダなど、日本の伝統的建築表現がコンクリートという近代的な素材によって、生み出された。半世紀経ても、コンクリートは健在。その前には、人々の豊かな暮らしへの願いが込められた、日本庭園としての南庭が広がる。



芸術の総合

撮影：三崎利博

全面ガラス張りの開放的な1階ロビー。香川県出身の洋画家 猪熊弦一郎の陶板壁画「和敬清寂」が、大らかな表情で人々を迎える。猪熊は、茶道の精神に戦後民主主義の理念を読み取り、作品とした。木製や陶製の椅子、木製棚、石テーブルなどは丹下研究室によるデザイン。公共空間での「芸術の総合」というテーマへの解答。



コア・システム

撮影：和泉誠司

高層棟(旧本館)の中央に、コンクリートの耐震壁を置くことで、構造的に建築の「背骨」とする、日本初の試み。コア内部に階段・エレベーター・トイレなどの共用施設を収め、小梁に沿った間仕切り自由な執務空間とされた。

香川県庁舎 開かれた庁舎と芸術の総合をめざして



香川県庁舎建設関係者 [1955年]

撮影：神谷宏治

中央の白い背広姿が金子正則香川県知事(当時)。そこから右に丹下健三、坪井善勝(構造設計)。金子知事は「民主主義時代の県庁としてふさわしいこと」、「観光香川の県庁本館としてふさわしいこと」などの設計条件を、丹下に示した。



鉄筋の組み上げ [1956年]

撮影：神谷宏治

当時まだ極めて珍しかった異型鉄筋を使用することで、コンクリートの強度の向上が図られた。また、鉄筋(主筋)の継ぎ手がガス圧接されていることも、当時としては珍しい。施工にも先端技術が投入されたことがわかる。



知事執務机

撮影：市川靖史

世界的なインテリアデザイナー 剣持勇のデザイン。日本の伝統的な意匠と、近代的な素材・技術を組み合わせた「ジャパニーズ・モダン」というスタイルがめざされた。現在は、香川県立ミュージアムで展示中。



1階ロビー受付機の加工

撮影：神谷宏治

当初は幾何学的なデザインだった受付機は、素材の形を活かすように加工された。加工された庵治石の受付機を視察する金子知事。



庭石を運び込む [1957年]

撮影：神谷宏治

「豊稔のシンボル」として選ばれた県産の庵治石は、丁場から半日かかりで現場に運ばれ、池にすえられた。



南庭のデザイン [1957年]

撮影：神谷宏治

丹下研究室が担当した。油粘土でスタディを重ねられたが、日本庭園に込められた権力者の不老長寿への祈りという考えを大きく転換させ、人々の豊かな暮らしを願う象徴として池に「豊稔のシンボル」の庭石を置く案ができた。



竣工当時の県庁ホール [1958年]

所蔵：香川県

家具は、剣持勇のデザイン。当時のまま使われている。



現在の県庁ホール出入口周辺

撮影：三崎利博

香川漆芸の後藤塗の扉と丹下研究室設計の棚



現在の屋上

撮影：三崎利博

(現在は立ち入りできません)

屋上のオープン・スペース
金子知事の提案により、屋上も開かれた空間となった。喫茶室の屋外カウンターでコーヒーやビールを飲み、瀬戸内海への景観を楽しむ。県民の手軽なくつろぎの場としてにぎわった。 撮影：神谷宏治

